湊川に五月雨が降る

辻　憲男（文学部教授）

地元の人はナンコウさんと呼ぶ。昔の市電の停留所も楠公前といった。神戸駅の山側、西元町から湊川のあたりは、明治以後ずっと町の中心地だった。貿易と造船が近代の繁栄をささえた。新開地は大正昭和をつうじて浅草や道頓堀とならぶ大歓楽街だったが、人の流れはしだいに元町三宮へと移った。

閑話休題（それはさておき）、1336年5月、楠木正成（くすのきまさしげ）はここで討ち死にした。さみだれの中、わが子正行（まさつら）を故郷へ帰らせた話は「桜井の別れ」として有名だ。『太平記』によると、足利尊氏の大軍が九州から攻めのぼり、新田軍が兵庫の和田岬で防戦した。最後は七百余騎の楠木軍が湊川をはさんで攻撃し、また後退すること16度、6時間の激戦におよんだが、味方は敗れて73騎になった。主従自害しようとヨロイをぬいだ正成の、身の斬り傷は11カ所であったという。現在の神戸文化ホールの北の広厳寺（楠寺）で禅問答をしたという伝説もある。明治になって墓所に造られたのが湊川神社である。

旧湊川は川底の高い天井川で、いまの湊川公園から南へ流れていた。土砂を押し流して兵庫港を埋めるので、百年前に川の付けかえ工事をした。もとの川床にできたのが新開地である。ところがつい先年も氾濫して町を水びたしにした。湊川の水源は二つあり、その一つが小部（おぶ）つまり鈴蘭台である。

兵庫区会下山（えげやま）公園の楠公陣地跡の碑。新湊川も電車も下をトンネルでぬける。